

# 米大統領選が始動、次も大接戦か

拓殖大学海外事情研究所教授 名越 健郎



Kenro Nagoshi

2020年11月投票の米大統領選が事実上幕を切った。与党・共和党では、トランプ大統領が再選に向けて動き始めた。政権奪還を狙う民主党はこれまでに15人以上が名乗りを上げており、かつてない混戦となっている。トランプ大統領の再選は、民主党候補が誰になるかにかかってくるが、候補者選びは難航が予想される。誰がでてきても接戦になりそうだ。

## 「ロシア・ゲート」を回避か

トランプ政権はこの2年、前回大統領選へのロシアの介入疑惑を巡る捜査に振り回されてきたが、モラー特別検察官による捜査が3月に終了し、捜査報告書が議会に提出された。結論は、トランプ大統領の選挙陣営が2016年大統領選で、ロシアと共謀した疑惑は見つけられず、大統領やその家族を含む新たな訴追は行わないというものだった。「証拠不十分」だったため、これにより、トランプ大統領は「ロシア・ゲート」疑惑の危機を乗り切ったとみられる。

野党・民主党の出方が焦点だが、民主党指導部も大統領弾劾は避ける見通しだ。弾劾成立には上院の3分の2の承認が必要

で、共和党が多数派の上院で承認されるはずがない。仮にトランプ大統領が失脚した場合、穏健派でバランス感覚のあるペンス副大統領が後継大統領に就任する。海外でも評価の高いペンス氏よりも、攻撃材料の多い独裁型のトランプ大統領の方が戦いやすいと民主党は見なしているようだ。

トランプ大統領の支持率は30%台と依然低いものの、中西部の白人労働者らコアな支持者の圧倒的支持は揺るがない。米経済が引き続き好景気であることに加え、中国脅威論に基づく対中貿易制裁も議会やメディアに支持されている。昨年の中間選挙で民主党が下院を制した後、議会対策で協調路線を見せ始め、再選戦略に着手している。

## 民主党候補はカラフル

一方、民主党では女性やマイノリティーなどかつてない多様な顔ぶれが立候補を表明した。今のところ、支持率が最も高いのが中道派のバイデン前副大統領だ。オバマ政権で副大統領を務め、安定感、知名度はあるが、76歳と高齢。2位のサンダース上院議員は「民主社会主義」を唱える極左で、前回大統領選で

若者らの旋風を巻き起こしたが、やはり77歳。

二人に続くのが、46歳の若手オルーク前下院議員だ。党派を越えた結束を訴え、昨年の中間選挙では共和党が強いテキサス州の上院選で共和党現職に肉薄した。このほか、インド系女性のハリス上院議員、「オバマ二世」を標ぼうする黒人のブッカー上院議員、メキシコ系移民三世のカストロ氏などカラフルだ。大企業を優遇し地球温暖化に無関心なトランプ氏に對抗し、い

ずれも格差是正や気候変動対策、人種間融和を重視している。

近く民主党候補者同士の討論会が始まるが、リベラル系が多く支持基盤が重複するだけに、次第に淘汰されるだろう。民主党支持者は、かつてのケネディ大統領のようなフレッシュユで演説のうまい若手政治家を待望する傾向があり、クリントン、オバマ両大統領も「小型ケネディ」だった。その意味では、集金力にもたけたオルーク氏が台頭しそうだ。

## 若者はリベラル志向

米大統領選は来年2月から予備選が始まり、7月の党大会で共和、民主の候補者が決まる。その後、両候補による本選挙に入り、テレビ討論などを経て11月3日が投票日だ。長丁場のマラソンレースで、内外のメディアが徹底カバーする。政策だけでなく人間性や失言、スキャンダル、それへの対応能力などあらゆる角度から注目される。スキャンダルで消えていった有力候補も少なくない。

今回は、コーヒチェーン最大手、米スターバックスの創業

者、シュルツ前会長が「第3の候補」として無所属で出馬することを検討している。民主党寄りのシュルツ氏が出馬すれば、民主党票を奪い、トランプ大統領に有利に働きそうだ。ブルームバーグ前ニューヨーク市長も無所属での出馬を検討しているとされる。大富豪の二人は豊富な選挙資金を持つだけに、立候補すれば、台風の目となる。

前回16年の選挙は、本命視された民主党のクリントン候補がよもやの敗北を喫し、敗北覚悟で出馬したトランプ氏が当選を果たした。次回選挙は、米経済の好調を背景に、現職・トランプ氏有利との見方があるが、先進国で唯一人口が増大する米社会でマイノリティーや若者の発言力が高まっていることも注視する必要がある。

特に、昨年の中間選挙では18歳から29歳までのいわゆる「ミレニアル世代」の67%が民主党に投票し、32%の共和党を圧倒した。この世代は、大戦後に生まれたベビーブーマー世代を抜き、最大の世代となりつつある。ミレニアル世代は政府が大きな役割を果たす「大きな政府」を支持する傾向が強く、トランプ政権の環境政策やメキシコとの国境への壁構築など移民排斥に批判的という。

米国の大統領選は各州ごとに勝者が選挙人を総取りし、選挙人の数で争う特殊な選挙だ。前回はクリントン候補が得票数で300万票上回りながら、選挙人の数で敗退した。次回も大接戦となる可能性が高そうだ。

(4月1日)

MOVEMENT